

太宰治『人間失格』についての研究～「失格」することと「安心感」～ Ōba Yōzō: A Study of the Main Character in "No Longer Human"

Abstract

"No Longer Human" is a Japanese novel by Osamu Dazai. The protagonist, Yozo Oba, shows strange behavior. This study examines the reasons behind his actions by analyzing his relationships.

1. 研究の目的

太宰治の『人間失格』においては、主人公である葉蔵が綴った「人間、失格。」という言葉と彼の行動との不一致がみられる。葉蔵は昔から人から与えられたものを拒むことができない人であった。しかし脳病院に入る直前、勧められたモルヒネを断るという行動を取る。その行動の変化はむしろ、人間らしくなったように思え、「人間失格」という言葉にふさわしくない。そこで、葉蔵にとっての「人間失格」の意義を明らかにすることで、この行動の変化を説明することを研究目的とする。

2. 調査・研究の方法

葉蔵自身によって書き綴られた「手記」における葉蔵の行動と、「はしがき」「あとがき」における他の登場人物が抱いた葉蔵の印象に焦点を置く。このように「人間失格」を通して葉蔵に起こった変化を客観的に分析する。

3. 分析と考察

葉蔵は、自分は本来世間に属していないが、道化を演じることで、世間からは世間の一部であるとみなされていると信じていた。しかし実際は、世間の人間は元から葉蔵を世間の一部としてみなしておらず、葉蔵は強制的に脳病院に入れられた場面で、初めてそのことを自覚した。この認識の一致が葉蔵に一種の安心感をもたらした。

4. 結論

葉蔵は、葉蔵と世間の両方で葉蔵に対する認識が一致したことを自覚した。葉蔵の不可解な行動の変化は「人間失格」したことによる安心感によるものであると説明できる。

5. 参考文献

- 高田知波 (1994). 「『人間失格』と〈葉造物語〉」
萩生田彩佳 (2010). 「『人間失格』論—不在の絶対者を求めて—」
久保昭恵 (2009). 「〈顔〉との遭遇—『人間失格』における他者認識の構造—」